
人 権 尊 重 文 集

春を呼ぼう

2026年1月

第 21 集



新 宮 市
新宮市教育委員会
新宮市人権尊重委員会

はじめに

新宮市教育委員会 教育長 速水盛康

新宮市では、互いの人権を大切にし、安心して学べる学校づくりを進めてきました。このたび人権尊重をテーマとした文集「春を呼ぼう」第二十一集を発刊されることを大変うれしく思います。

日々の学習や生活の中で子どもたちが感じたこと、考えたことを丁寧に言葉にまとめた一編一編には、互いを思いやり、尊重しようとする温かな気持ちが込められています。

人権とは、自分も相手も大切にしながら、よりよい社会をつくっていくための土台です。日々の生活の中で感じたこと、考えたことを言葉にすることは、自分自身を見つめ直し、他者の思いに気づく大切な学びとなります。

今回の文集には、はじめや差別をなくしたいという強い願い、自分や友達、家族を大切にしたいという思い、多様な考えや生き方に向き合おうとする真摯な姿勢が数多く見られます。これらの文章は、子どもたち自身の成長の証であると同時に、私たち大人にとっても、多くの気づきと学びを与えてくれる貴重な内容です。

社会は多様な個性と価値観の集まりです。お互いの違いを認め、困っている人にそつと手を差し伸べられる心を育むことが、未来を生きる皆さんにとつととても大切です。

この作文集をより多くの方々にお読みいただき、差別のない、市民の誰もが笑顔で、尊重される新宮市の実現に向け、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願っています。

おわりに、この文集発刊に当たり御尽力をいただいた市内小中学校をはじめ関係者の皆様方に対し、心から感謝を申し上げます、ご挨拶いたします。

★小学生の部★

かわいい妹	王子ヶ浜小学校二年	1
わたしのきょうだい	熊野川小学校二年	1
わたしの大親友	三輪崎小学校二年	2
わたしの弟	神倉小学校二年	2
助けてもらったこと	三輪崎小学校三年	3
ぼくのおじいちゃん	高田小学校三年	3
クラスのきまり	王子ヶ浜小学校四年	4
手話こうざで学んだこと	熊野川小学校四年	5
本当の幸せ	神倉小学校四年	5
いじめは凶器	高田小学校五年	6
ぼくのおばあちゃん	王子ヶ浜小学校六年	7
世界を変える、私の言葉の魔法	熊野川小学校六年	7
みんなちがってみんないい	三輪崎小学校六年	9
ネット上の誹謗中傷について	神倉小学校六年	9

★中学生の部★

おはな	光洋中学校一年	11
ノリ	緑丘中学校一年	12
差別のない世界をつくるには	城南中学校一年	12
九月一日について	高田中学校二年	13
感謝の気持ちを言葉にして	近畿大学附属新宮中学校二年	15
男女差別をなくすために	近畿大学附属新宮中学校二年	16
生きる権利	近畿大学附属新宮中学校二年	17
不思議な言葉で	光洋中学校二年	17
色々な人がいる世界	緑丘中学校二年	18
戦争が奪うもの	城南中学校二年	19
ヘルプマーク	熊野川中学校二年	20
考え方の違い	光洋中学校三年	21
本能	緑丘中学校三年	22
戦争の記憶が教えてくれたこと	城南中学校三年	23
私が歳を重ねる理由	熊野川中学校三年	24
誹謗中傷の危なさについて	熊野川中学校三年	25

小学生の部

かわいい妹

王子ヶ浜小学校 二年



わたしのママは、十月に赤ちゃんをうみました。一週間ぐらいたって、ママと赤ちゃんが家に帰ってきました。わたしは、帰ってくるのをまっていたので、ママと赤ちゃんに会えてうれしかったです。

帰ってきてから、わたしは赤ちゃんのことをずっと見ていました。大きくなったら何になるのかな、大きくなったらいっしょに何をしてあそぼうかなと考えました。三さいの弟も赤ちゃんを見ていました。弟は、「赤ちゃんとおふろに入りたい。」と言っていました。

わたしは、すこしせきをしていたので、うつらないように赤ちゃんにさわるのをがまんしました。せきが出なくなつてから赤ちゃんの手をさわってみました。そうしたら、ギューッと手をにぎってくれて、目もあけてくれました。はじめて目をあけてくれたからうれしかったです。手は、とても小さくてかわいかったです。早く大きくなつてお話をしたり、なかよくあそんだりしたいです。たぶん、弟も早くあそびたいと思つていると思います。

かわいい名前がきまるといいです。ほねもじょうぶで、元気な子になってほしいです。二回目のお姉ちゃんがんばります。弟は、はじめてのお兄ちゃんだからがんばつてほしいです。

わたしのきょうだい

熊野川小学校 二年



わたしには、きょうだいがたくさんいます。前にお兄ちゃんにわたしは、こうききました。

「お兄ちゃん、ぜんいんかぞくをかぞえたら、何人になるの。」すると、お兄ちゃんは、

「一、二、三、・・・。」

とかぞえて、

「十五人か十六人。」

と言つたので、

「多。」

と言いました。こころの声で何でこんなに多いんだろうと思つきました。

今いっしょにすんでいるわたしのかぞくは、みんなで六人です。きょうだいが多いので、わたしは、毎日お姉ちゃんたちとあそべて楽しいです。

きょうだいみんなのことをしようかいます。

一番上のお姉ちゃんは、高校生です。わたしは、いつもあまえています。近くにいと、ひざの上ののつてだっこをしてもらいます。高校生のお姉ちゃんは、どうぶつがすきです。

お兄ちゃんは中学生です。歌と車がすきです。いつもちよっかいをかけ合ったり、おいかけっこをしたりします。楽しいです。

六年生のお姉ちゃんは、あそびにつき合ってくれるから、わたしは毎日楽しいです。

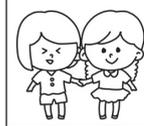
わたしは、きょうだいのなかで一番すえっ子なので、みんな

わたしとあそんでくれます。しょつ中けんかをしてしまうけど、お父さんがとめてくれます。

けんかもするけど、いつまでもそばにいてほしいです。

わたしの大親友

三輪崎小学校 二年



わたしは、大すきな友だちがいます。その友だちは、いつもいっしょにあそんでくれて、いつもいっしょです。わたしが、わからないことがあったらそうだんしてくれれます。けれど、ときどきゆくくだいをおいていたばしよにゆくくだいがなかった時に、きめつけあつて、ケンカをしていますが。

わたしは、自分がわるいと思っても、なかなか自分からあやまれない時があります。でも、そんな時は、友だちがあやまりに来てくれます。わたしは、ごめんね、と、ありがとうとこころの中で思っていました。また、同じようなことがおきてしまったら、こんどは、自分からごめんねとあやまりたいです。わたしは、友だちを大切にしようと思います。そんな友だちが、一番大すきです。

わたしの弟

神倉小学校 二年



わたしの弟は、しょうがいをもっています。一さい、二さい、三さい、四さいくらいまで、しょうがいがあったことはしりませんでした。弟は、しゃべることができないけれど、ほいく園、じどうかんにも行っています。わたしも、お休みの日にはいっしょに行つてあげます。その時は、一りん車のれんしゅうをしたり、工作のおり紙をいっしょにしたりして、楽しんでいきます。ほかに、友だちと弟とあそんだり、弟とおもしろい話をして、おもしろい時もあります。

けれど、弟と話を通じなくてイライラしたり、けんかをしたりする時もあります。その時には、母ちゃんと話したことを思い出します。

「母ちゃん、なんで弟、しょうがいもって生まれてきたん。」

「この子なら、がんばつてそだつていつてくれると思つて、そだててきたんやで。」

私は、この母ちゃんとの話を毎日思い出してねます。父ちゃん母ちゃんも、がんばつてそだてているんだなと思います。

十月に、弟がびょういんに行く時に、いっしょに行つてきました。前にくらべると、先生とお話ができるようになってきているのすがたを見て、

「だんだんせい長しているんだな。」

と、うれしい気もちになりました。わたしも

「がんばらないとな。」

と思います。

「けんかしてしまっただらどうしよう。」
「やさしくできるんかな。」
と母ちゃんに言ったこともあります。母ちゃんは、
「そんな時は、母ちゃんに言っただけ。」
とやさしく言ってくれました。

これから、家でも、じどうかんでも、家ぞくのみんなどやさしくしたいなと思います。

助けてもらったこと

三輪崎小学校 三年



二年生の雨の日に、学校へ行こうと歩いていました。かさがいるくらいの雨でした。かさをさしていると、しかいが悪くて、前が見えにくかったです。雨の日は、いつもこうなので、気にせず歩いていました。ぼくの家から学校までは、とても近いので、安心して歩いていました。

声が聞こえて、自転車のお店の方を見ると、女の人が、ぼくに何かをさげんでいました。でも、雨の音がじやまをして聞き取れませんでした。

ぼくが、そのまま歩いていると、その人が急にこっちに向かっただけでした。急に近づいてきたのでびっくりしました。「何の用だろう。」と思っただけなら、服をつかまれて、歩こうとするのを止められました。

次のしゅん間、目の前を車が横切りました。けっこうとばし

その時に、ぼくは、はじめて女の人が、車が来ていることを

教えてくれようとしていたことに気がつきました。ぼくは、おどろいて、その場からはなれてしまいました。

後から思い返すと、助けてもらったんだから、おれいを言うべきだったのに、言葉が出てこなくて、何も言えませんでした。

ぼくは、とっさにおれいも言えなかったけど、その人は、ぼくのことをまよわず助けてくれました。その人に、「ありがとうございました。」と伝えたいです。そして、ぼくも、こまわっている人や、あぶない目にあいそうな人がいたら、まよわず声をかけて、助けられるようになりたいです。

ぼくのおじいちゃん

高田小学校 三年



ぼくのおじいちゃんは、いつもやさしいです。夏休みになるといつもえい画へつれて行ってくれます。えい画に行ったらポップコーンやジュースを買ってくれたり、えい画のチケットのお金がたりないときは、たりない分をはらってくれたりします。えい画が終わったら昼ごはんをこちそうしてくれれます。夏休みの宿題で絵をかく時にも手つだってくれれます。おじいちゃんはとても絵が上手です。

おじいちゃんは、たまにおこります。それは、きけんな所に行こうとした時やダメなことをしたときにおこります。おこっても、やさしくおこってくれれます。おじいちゃんは、やさしいです。

夜になると、いつもおじいちゃんの家に行きます。おじいちゃんの家に行くとパソコンをかしてくれれます。かしてくれれたパ

ソコンでぼくは、ユーチューブを見ます。パソコンをかたづけるとき、かたづけ方がわからないので、いつもおじいちゃんがかたづけてくれます。

バーベキューをするときもおじいちゃんは、手つだつてくれます。たりない物があるときは、いつも用意してくれます。ぼくがこまっていたら、必ず声をかけてくれます。後かたづけをするときも、あみまでキレイにあらつてくれます。

ぼくとおじいちゃんのゆめは、「いっしょに駅でんを走る」ことです。いつもおじいちゃんが必死に走っているのを見て「すごいな。」

とぼくは思っています。だから、ぼくも学校から帰ったら、マラソンの練習をがんばっています。おじいちゃんとのゆめを早くかなえたいです。

こんなやさしいおじいちゃんのが、ぼくは大好きです。ずっと、元気でいてほしいです。

クラスのきまり

王子ヶ浜小学校 四年



あるとき、クラスの友達が、けんかをしたと聞きました。みんな仲が良かったのに、その友達がちよつといやな言葉を言ってしまったって、言い合いになって、話さなくなりました。一方の子には別の友達ができ、もう一方の子には新しい友達ができず、でもどちらも相手のことを気にして見ていることが、私には分かりました。

私も一度、とても仲の良い親友とけんかをしました。そして

お昼休み、外から帰って来て、白かごの中をそうじしていると、手紙が入っていました。その手紙は、けんかをした親友からでした。手紙には、

「ごめんね、つらい言葉を言ってしまった。」
と書いてありました。私はその手紙に、

「こちらこそ、ごめん。」

と書きました。そしたら、仲直りができました。

そのことを思い出し、けんかをしている友達にも、

「手紙を送ってみては。」

とアドバイスしたかったのですが、私にはそんな勇気がありませんでした。だからその子に

「仲直りしないの。」

と聞いてみました。でもその子は、

「あつちから『友達やめよ。』って言ってきたんやから、いやだ。」
と言いました。私は不思議な気持ちになりました。

本当は仲直りしたいんじゃないのかな。このままでいいのかな。早く仲直りすればいいのにな。手紙を書いてみたらいいのにな。と、心かもやめました。

そのとき、まどの方から「ピーピー」と音が聞こえました。給食のトラックがバックしている音でした。その音につられてまどの方を見ると、そのまどの上に、「四年一組のきまり」がはつてあるのが見えました。きまりにはこう書いていました。

『はじめをもち、忘れ物をせず、人と物とを大切に作る、想像力のある四年一組』

私は、それを見て勇気をもらいました。友達にも、このきまりを思い出して、仲直りをしてほしいと思いました。

四年一組がスタートした今年の四月に、みんなで決めた『クラスのきまり』です。みんなを守って、だれもがいやな思いをしない楽しいクラスにしたいです。

手話こうざで学んだこと

熊野川小学校 四年



学校で手話こうざがありました。耳の聞こえない方と手話通訳の方が来て、手話や口話などいろいろ教えてくれました。

まず日常生活での苦勞を話してくれました。休みの日に電車に乗って、電車の放送が聞こえなくて駅に着いたことに気づかず、そうじをしている人に起こしてもらったことがあるそうです。また、さいがいの時に放送が聞こえなくて、道路に水がたまっての気づかなかったそうです。車が水につかってしまふから移動しないといけないと教えてもらって車を移動したら、車は無事だったけれど、風が強くて体中ぬれて大変だったとの事でした。耳が聞こえないということは大変なんだなと思いました。

次に、耳が聞こえない人がいたら手伝ってあげてほしい、おとしよりで耳が遠い人にも手伝ってあげてほしい、みんな関係ないのでなく、みんな同じで、自分が健康じゃなかったらどうするか、相手の立場に立って考えて行動してほしいと話してくれました。私はもし耳が聞こえない人がいたら、相手の立場に立って考えて行動しようと思いました。

それから、昔の時の話も心にのこっています。六年生から中学校ぐらいの時に、自分は耳が聞こえないことに気づいたそうです。それから聞こえない人としてやっていこうと決めて、差別をなくすために今までがんばっているとの事でした。私は自分の耳が聞こえないと知っていてもがんばっていけるのがすごいと思いました。

手話こうざが終わってから、自分の名前をおぼえた手話で伝

えることができたのでうれしかったです。もし耳が聞こえない人に出会ったら、教えてもらった手話や身ぶりを使って助けあげたりコミュニケーションをとったりしたいです。

本当の幸せ

神倉小学校 四年



みなさんは、「本当の幸せ」というものを知っていますか。「幸せ」は、楽しいことや、おいしいものを食べたときに、幸せな気分になれるのですが、「本当の幸せ」は、それだけではないと、ぼくは思います。

ぼくたちが住む日本以外の他の国では、まだ今も、戦争をしている国があります。戦争をしている国では、子どもでも大切な家族を亡くし、学校に行くこともできなくて、勉強をしたくてもできない子がいるのです。

ぼくが初めて「戦争」というものを知ったのは、小さいころに見た、テレビのニュースでした。学校が爆弾でこわされ、がれきだらけになっている映像でした。その時、戦争をしている国は、悲しいなと思いました。そして、三年生の時に、「ちいちゃんのかげおくり」、四年生では「二つの花」という物語を国語で学習しました。どちらも日本に戦争がおこった時代のお話でした。戦争があった時代では、食べ物もおなかいっぱい食べることができず、空襲という爆弾におびえながら生活をしなければなりません。家族や友達、そして自分の命が危なくて、自由がない時代だったのです。

ぼくは、今の平和な時代に生まれてよかったと思いました。

ぼくがみんなに伝えたい事、それはつまり、この戦争のない日本の国で、家族がいつもそばにいること、友達と元気に学校に行けることが、幸せなことだということです。

みなさん、もし、自分の家族や学校がなくなってしまうたら、どうしますか。戦争とはそのような幸せをうばってしまうものなのです。ぼくはそんなおそろしい戦争はこれからもずっと、起こってほしくないと願っています。

今、家族といっしょにいれること、友達と笑い合えること、学校に行って勉強ができること、ここで平和なくらしをしていくことこそが「本当の幸せ」なのです。

だからぼくは、いつもぼくのすぐそばにある「本当の幸せ」をこれからも大切にしていきたいと思います。

いじめは凶器

高田小学校 五年



ぼくは、以前いじめにあったことがあります。その内容は、「暴力」ではなく、悪口を言われたりにらまれたり、いやなことを言われたりといったものです。それが二、三年くらい続きました。ぼくの心はズタボロで、もう学校に行きたくありませんでした。しかし、

「先生にもだれにも言うなよ。」

とおどされていたので、だれにも相談することが出来ませんでした。告げ口したと思われ、もつといじめがひどくなることをおそれたからです。

ある日の授業中、消しゴムが落ちていたので拾いました。持

ち主に返すと、にらまれました。ぼくは、「にらまれるような事したかな。」と不思議な気持ちになりました。授業が終わると、また、「消しゴムひろうな。」と言ってきました。その時ぼくは、「親切をしたのにいやがられた。どうしてだ。」と頭の中のモヤモヤがふくらんで爆発しそうでした。

また、ある日の出来事です。季節は冬でとても寒い日でした。外で活動している時、フード付きの上着を着ている人がいました。先生から、あぶないからぬぐうように、と注意されていました。様子を見てみると、ブルブルふるえてとても寒そうだったので、ぼくは「上着かそうか？」と聞きました。そしたら「くさいしきたないからいらぬ。」と言われました。その会話をぐうぜん先生が見ていたことで、事件が発覚しました。

その時、心の中で「ざまあみろ。」と思った一方で「もつといじめがひどくならないかな。」と不安もありました。

その後、先生や家族にこの話以外にも今まであったことを全部話しました。話し合いの結果、あやまってくれました。しかし、ぼくはこう言いました。

「ぼくは許しません。」

決して許してはいけないことをされたからです。

ぼくは今、毎日元気に学校に行っています。たまにけんかもするけど、友達となかよく過ごしています。しかし、日本ではこうしたいいじめで自ら命を落とす人もいます。

文部科学省の「令和五年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、小学校から高校までのいじめの認知件数は、計七十三万二千五百六十八件あります。そのうち、いじめが問題で自殺をした人は七人です。

この七人という数を多いと感じるか少ないと感じるかは人それぞれですが、ぼくは多いと思います。他人のひどい行いのせいで自分の人生を終わらせてしまった人が一年間で七人もいるの

です。

ぼくがいじめにあったことを公開するのは正直勇気がいりました。しかし、それよりもいじめがなくなっただけの思いの方が強いのです。

いじめを少しでも減らすために、一度自分の言動をふり返ってみて下さい。知らない間に人をきずつけるようなことをしたり言ったりしていませんか？自分の悪い行いがだれかの凶器になる可能性があることを忘れないで下さい。

ぼくのおばあちゃん

王子ヶ浜小学校 六年



ぼくのおばあちゃんは、ALSというめずらしい病気で亡くなりました。ALSという病気は、手・足・舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉がだんだんやせて力がなくなっていく病気です。おばあちゃんは、手に力がいなくなり病院に行きましたが、なんの病気かわからず生活をしていました。だんだん足も動かなくなりやつとALSという病気がわかりました。ALSという病気は、三年から五年しか生きられないと知り、家族みんなつらかったです。病気がわかってからも家で普通に生活をしていました。訪問看護師の人に家に来てもらい、病気の進みをおくらす点滴を打ってもらったりしました。手が動かなかったので、家族でご飯を食べさせたり、トイレにつれていったりしました。足が悪くなってからは車いすもつかって外出していません。車いすでいろんな場所へ旅行に行きました。ドイツ・ニーランドでは、車いすのままアトラクションに乗りました。キャラ

クターもいっぱい集まってくれたり、スタッフさんも優しく声をかけてくれてすごかったです。おばあちゃんもみんなと一緒に楽しんで喜んでくれました。鳥取砂丘では砂浜の上でも走れる車椅子にのり、砂漠の上まで行きました。宿泊するホテルでは、不便なことがなく、いろいろ対応をしてくれるので車椅子で行ける旅行はたくさんありました。

亡くなるまで五年という短い間でしたが、看護師やヘルパーさんのおかげで、家でいつも生活ができて良かったです。ALSという病気はともつらい病気です。早く直せるくすりや治療方法がみつかれば、命が助かるようになってほしいです。

世界を変える、私の言葉の魔法

熊野川小学校 六年



私は、言葉にはすごい力があると思っています。まるで魔法みたいに、一瞬で人の心を明るくすることもできれば、逆に、深く傷つけてしまうこともできてしまうからです。

毎日の生活の中で、私たちはたくさんさんの言葉を使っています。「おはよう」の挨拶から、「一緒に遊ぼう！」という楽しい会話、そして時にはケンカの時のきつい言葉まで、数えきれないほどの言葉が飛び交っています。この一つひとつの言葉が、実は、相手の心に大きな影響を与えているのだ、と強く感じるようになりました。

言葉は、目には見えないけれど、世界を変える力を持っています。だからこそ、私たちはこの「言葉の魔法」を、人を喜ばせるために使いたいと思っています。

最初に、人を悲しませたり、傷つけたりする言葉について考えたいと思います。

人を傷つける言葉は、使ってははいけません。使ってしまうと、相手の心に大きな傷を作ってしまう。体の傷なら手当てをすれば治りますが、言葉でつけられた心の傷は、なかなか治りません。もしかしたら、その傷は一生消えないまま、その人の心に残ってしまうかもしれないのです。言われた方は、その時の情景や声まで、ずっと忘れずに覚えているでしょう。それほどまでに、ネガティブな言葉の力は重いのです。

私は、重松清さんの『きみの友だち』という本を読んで、言葉の恐ろしさを改めて感じました。物語の中で、大縄跳びの練習中に失敗してしまった堀田ちゃんに対して、万里ちゃんが本気で怒り、「サイテー、こいつ！もう死ね！」というひどい言葉を投げつけます。堀田ちゃんは「ごめんっ、マジにごめんっ」と謝っても許してもらえません。万里ちゃんはさらに「クラスに迷惑かけんなよ、ばーか、くそ、死ね、土になれ」と追い詰めます。堀田ちゃんは、悲しい気持ちを隠そうと「……はい、土になりまーす」とおどけて床に這いつくばりますが、その顔は笑っているのに泣きそうでした。

私はこのシーンを読んで、胸が苦しくなりました。堀田ちゃんがどれだけ辛く、悲しい気持ちになったかが伝わってきたからです。「死ね」という言葉は、冗談でも言っただけではない、とても重い言葉です。万里ちゃんは、もしかしたら興奮して、そこまで深い意味を考えずに言ってしまったのかもしれませんが、でも、言われた堀田ちゃんにとって、その言葉は鋭い刃物のように心に刺さったはず。言った人は忘れてしまっても、言われた人は忘れられない。そんな悲しい経験を、誰にもしてほしくないと思いました。

だから、私たちは言葉を口に出す前に、「もし、この言葉を自

分が言われたらどう感じるだろうか？」と、一度立ち止まって考えることが大切だと思います。

その一方で、人を喜ばせることのできる言葉は、人の心を温かくする魔法です。私は、そういう言葉をたくさん使っていきたいです。

人を喜ばせる言葉の代表が「挨拶」です。もし、クラスで元気がなさそうな子がいても、「おはよう！」と元気よく挨拶をすると、その子の元気も少しわいてくるかもしれません。登校中、道ですれ違った地域の人に「こんにちわ！」と言われただけで、なんだか自分も元気をもらえて、一日をがんばろうという気持ちになります。挨拶は、人と人との心を繋ぐ、一番簡単で一番大切な「心のキャッチボール」なのだと思います。

そして、もう一つ、とても大切な言葉が「ありがとう」です。「ありがとう」は、言った人も、言われた人も、両方を幸せにする不思議な言葉です。

たとえば、私が教室の掃除を頑張った時、先生や友達から「いつもありがとう。おかげで教室がきれいだよ」と言われると、心の中で「やってよかったな」と思います。また、私がかの手伝いをして「ありがとう」と言われると、心が温かくなります。この「ありがとう」の輪が広がれば、みんながお互いを認め合って、優しい気持ちでいられると思います。

他にも、友達がテストで良い点を取った時に「すごいね！」と言ったり、失敗して落ち込んでいる時に「大丈夫だよ、次があるよ」と声をかけたりするのも、人を喜ばせる言葉です。誰かの努力を認め、優しく寄り添う言葉は、その人の自信や勇気を育てます。

言葉は、本当に力を持っています。人を深く傷つけることもあれば、一日の始まりを明るくすることもできます。私は、重松さんの本を読んで感じた、堀田ちゃんの悲しそうな顔を忘れ

ません。そして、自分が言われて嬉しかった「ありがとう」や「大丈夫だよ」という温かい言葉も忘れません。

だから、私はこれから、言葉を口に出す時に、一つひとつに「思いやり」という魔法を込めて使っていきたいです。きつい言葉を言いたくなくても、ぐっとこらえて、相手の気持ちを考えて選ぶようにします。そして、たくさんの人に優しさや元氣、勇気を届けられるような、温かい言葉をどんどん増やしていきたいです。

言葉は、私たち一人ひとりが持っている大切な贈り物です。この贈り物を、人を傷つける道具としてではなく、みんなの心を幸せで満たすための「優しい魔法」として、大切に使うしていきたいと強く思います。

みんなちがってみんないい

三輪崎小学校 六年



僕たちは一人ひとり性格や考え方、好きなことや得意なことがちがいます。そのちがいをこそが「個性」です。人はみんな同じでないからこそお互いを理解し合い助け合って生きていくことができるのだと思います。

しかし、時々、人のちがいをからかったりまちがっていると言ったりする人がいます。それは、個性を認めていない行動だと思えます。

例えば、話すことが好きな人もいれば、あまり話さない人もいます。どちらが正しいということではありません。自分とはちがうからといって、悪くいうのではなく、「そういう人なんだ

だな。」と受け止めることが大切です。

個性を尊重するというのは、人のちがいを認めるだけでなく、自分のちがいも大切にすることです。周りに合わせようとして自分の考えを言えなくなったり、本当にやりたいことをがまんしたりすることは、とても悲しいことです。自分の気持ちを大事にしなから相手の気持ちも考えることが個性を尊重することだと思います。

また、学校で過ごす中、人それぞれいろいろな意見が出ます。自分と考え方がちがうからといって、「それはちがう。」と決めつけるのではなく、どうしてそう思うのかと一度立ち止まって考えることが大事なのではないでしょうか。お互いがお互いのことを考え合うことで、理解し合え、よりよい方向へと歩んでいけると思います。

僕は、これから人の個性を大切にし、自分の個性にも自信をもつて生きていきたいです。みんながちがいを認め合えば、学校でもこの社会の世の中でももつと安心して過ごしていくことができますと思います。

個性の尊重こそが、人を大切にする心の出発点だと思います。

ネット上の誹謗中傷について

神倉小学校 六年



私は、この時代にはスマートフォンやパソコンが欠かせない時代になったと思います。私達はネットのおかげで外へ出ずに物を買えたり、わからないことはすぐ調べることができたり、即座に情報を知ったりすることもできます。しかし、うまく使

わないと、トラブルを生み出したり、トラブルにまきこまれたりしてしまう可能性も十分にあります。ゲームの課金、SNSでのトラブル、そんなトラブルの中から、SNSのトラブルについて考えました。

とても便利なものだと思いますが、このネットが誹謗中傷という深刻な問題を生み出しています。誹謗中傷とは、簡単に言うところ根拠がない悪口などを匿名（誰か分からない状態）で発信するというものです。何年前か前、SNSである有名人に匿名で暴言を書き込み、それが原因で有名人が自殺してしまうというニュースを見ました。顔が見えない匿名だからこそ、暴言を書き込む罪悪感が薄れていたのだと私は思います。誹謗中傷はやった側もやられた側も嫌な気持ちになります。やった側が軽い気持ちでも、やられた側の心には深く傷が刺さり、精神にも傷が付きまます。軽い気持ちがこのようなことを生み出してしまうことを忘れないでください。

誹謗中傷をなくすには、一人ひとりの心がけが大切で、暴言や、自分が嫌なことを書き込まれたら警察や家族に相談するなどの対処を取ることでも大事ですが、受けたら対処するということを繰り返しても、誹謗中傷はなくなりません。この世から誹謗中傷をなくすためには、一人ひとりが絶対に誹謗中傷をしない・許さない態度が大切だと私は考えます。私はまだ携帯を持っていませんが、携帯を持ったら、誹謗中傷を絶対にしないと誓います。

誹謗中傷が多いということは、スマートフォンやパソコンをつかっている人がそれだけ多いということです。私は決してスマートフォンやパソコンを使うなどは言いません。みんなが楽しく正しく使ったらいいだけの話です。一人ひとりが心がけ、誹謗中傷がない明るい未来になればいいと願っています。

中学生の部

おはな

光洋中学校 一年



私は犬を飼っていました。名前は「おはな」です。父が名付けました。名前の由来はハワイ語で「家族」という意味です。私が生まれる一年前から飼いだしたそうです。私はおはなが大好きでした。

しかし、二〇二五年の三月はじめ、おはなが咳をしはじめました。どんどん体調が悪くなり、病院へ連れていくと、気管支狭窄という病気でした。気管支狭窄とは、気管支が狭くなり息がしづらくなる病気です。咳も続きます。

そのとき、私は、「一ヶ月くらいで治るのかな。」とのんきに思っていました。しかし、そんなことはありませんでした。夜はずっと咳をされていて、おはなは全然眠れません。どんどんおはなの体調が悪化していききました。父や母もおはなの介護で睡眠もなかなか取れず、仕事を休まなければならいこともありました。そんなおはなの様子をみて、私はどんどん不安になっていききました。私にできることはないのかなと思っていました。何もできませんでした。

そんな中ですが、私は中学生になるということで、スマホをはじめ買ってもらいました。私ははじめてのスマホですごく嬉しくて、スマホばかり触っていました。そのことを今とても後悔しています。おはなともっと遊んだり、介護をしたりしたらよかったです。

中学生になる直前の春休み、私は友達の家泊まりに行きま

した。その間におはなが亡くなりました。私は家族から電話でそのことを聞きました。すごく悲しかったです。聞いた瞬間から泣きそうになったけど、友達との楽しい空気を壊したくなくて、言い出せず泣くことができませんでした。

家に帰ると、亡くなっているおはながいました。触るといつもあたたかかったのに、その時は冷たかったです。本当におはなが死んだんだと思いました。その日の夜はずっと泣きました。

その夜、ラインがきました。友達からでした。「おはな死んだんやっつね。あなたのお母さんから聞いたよ。悲しいよね。」と書いてありました。この子も飼っていた犬が亡くなるという経験をしていました。なので、私の状況を理解してくれ、私の気持ちにも共感してくれました。すごく嬉しくてもっと泣いてしまいました。おはなが亡くなってから数日間はずっと泣いていました。

おはなが病気にならなかつたらもっと長生きしたのかなと考えると、すごく悔しくなります。学校から家に帰ると、毎日のようにしつぽを振ってなでてほしそうな顔で私のところに寄ってきたおはなにもう会えないのはとても悲しいです。

私は「おはなは幸せだったのかな。」とずっと考えています。私が暗い顔をしていたら、天国にいるおはなが心配するかなと思ってしまうように、おはなに心配をかけないように、今は友達や家族としあわせに生きています。

おはなの最期には後悔があります。もっとおはなの時間を過ごせばよかつたと思います。でも時間はもどきません。

私はおはなの死から、たくさんのことを学びました。毎日の生活をあたり前だと思わず、今生きていることをありがたく思い、しあわせに過ごしていきたいです。祖父母と食事会をよくしますが、これからもごはんと一緒に食べたいし、旅行にも一緒に行ってみたいです。両親とは、今まで以上に何かを一緒に

してみたいです。ごはんを一緒に作るのもいいなと思います。友人とはいつも楽しい会話をしていますが、これからもそうやって生きたいし、できたら少し遠くにもおでかけしてみたいです。

今関わっている人との時間を大切に生きていきたいです。

ノリ

緑丘中学校 一年



「ノリだから。」最近、こんな言葉を聞くようになった。

私は、急に話しかけられても、曖昧な返答しかできなかった。相手は、面白さを求めているのだろうか。私は、そんなノリについていけない。だから、いつも相手は、「ノリ悪いな。」と直接言わないが、遠回しに言われることはあった。ノリが悪いというのは、そんなにいけないことなのだろうかと思った。

私の身の回りには、「ノリがいい子がいい。」という子が多かった。私は、そんなみんなについていけず、どうすれば良いのかわからなくなっていた。授業中でも、「ノリだから。」と言って笑い出している時があったが、私は笑えなかった。「ノリって使えばどんな時も笑い出したりしていいの。そもそもノリって何なの。」と、ノリという言葉に悩まされて、いつしか、私なんか面白くない。と自分で自分を締め付けていた。

そんな時ある出来事が起きた。いつも通り友達と一緒に喋っている、知らない男子たちが話しかけてきた。私は何も言えず黙っていたが、一緒にいた友達は、面白いことを言ったりして相手を笑わしていた。その男子は、「ノリいいじゃん。」とい

い、楽しそうにしていた。その時、「私がずっと悩んでいたことを友達は、簡単にできている。どうしてだろう。」と思った。私はその後、急いで友達に聞いてみた。「なんでみんなのノリについていけないの。私だったらそんな面白いことも言えないし、周りの目とか気になるし・・・。」と言ったら、「何それ。そんなの気にしなくていいじゃん。」と言われて、ハッとした。気にしなくていい。それは当時の私には、痛いほど刺さった。その日から、「ノリ」に対する考え方が変わった。今までは「ノリにのれないなんて・・・。」と思っていたが、今は、「みんなのノリなんて気にしないで、自分らしくいればいい。」と思えるようになった。友達の一言が私を救ってくれた。

私は今も、ノリがいいか、というところではない。でもノリが悪いのが嫌だということもなかった。「ノリだから。」といって、みんなに合わせている時より、自分らしくいるときの方が、楽で楽しかったからだ。

まだ世の中には、ノリを気にする人はたくさんいるだろう。「ノリ」が悪いものだとは思わない。だけど、ノリにうまく乗っていけない人に、冷たい目を向けるのは、あつてはならないと思う。このようなことがないよう、ノリにすぐ流されるのではなく、気にしないでありのままの自分でいたいと思っている。

差別のない世界をつくるには

城南中学校 一年



ぼくはサッカーが大好きです。小学校の頃からクラブチームに入って、毎週練習や試合に出ています。将来はプロサッカー

選手になって、世界の舞台でプレーすることが夢です。そんな
ぼくがいつも楽しみにしているのが、スペインのプロサッカー
リーグ「ラ・リーガ」の試合を見ることです。ラ・リーガには、
世界のトップレベルの選手たちが集まっています。ぼくの憧れの
選手もたくさんいます。でも、そんなラ・リーガでとても悲し
い出来事がありました。

それは、ブラジル出身の黒人選手、ヴィニシウス・ジュニオ
ール選手が試合中に人種差別を受け続けているということでした。
二〇二二年十二月の試合では、観客が彼に対して差別的な暴言
を浴びせました。その行為は「ヘイトクライム（憎悪犯罪）」と
みなされ、二〇二五年五月、スペインの裁判所は差別的な行為
を行った者に対して有罪判決を言い渡しました。刑は執行猶予
付きでしたが、彼らは禁錮刑と罰金、さらにスタジアム入場禁
止という処分を受けました。これは、スペインでサッカーの試
合中に行われた人種差別が初めて法律で裁かれた、とても大き
な出来事です。ヴィニシウス選手自身も

「これが歴史的な判決になるように」

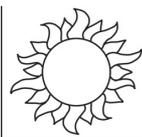
とコメントしていました。でもぼくがもつとショックだったの
は、そのあとも人種差別が続いているということでした。実際に、
その後の試合でも、ゴールを決めたヴィニシウス選手に対して
一部の観客が差別的な真似をしたという報道がありました。こ
れにはラ・リーガもすぐに反応して、関係者を特定し、法的な
対応を進めています。でも、判決が出たあとでも、このような
ことが起こってしまうのは、本当に悲しいことです。

ぼくは、どんなに上手な選手でも、人種差別を受け続けたら
サッカーを楽しめなくなると思います。試合に集中できなくな
るし、心にも大きな傷が残るはずですよ。ヴィニシウス選手の上
うに、勇気を持って声を上げることがとてもすごいことだと思
います。この出来事を通じて、ぼくは「サッカー選手になる」

という夢と同じくらい、「差別のない世界をつくりたい」と思う
ようになりました。まずは自分が人を見た目で判断しないこと。
チームメイトや相手選手をリスpekトすること。小さなことか
もしれないけど、そういう積み重ねがきつと大きな変化につな
がると思います。サッカーの試合で一番大切なのは、勝ち負け
ではなくてフェアプレーの精神だとぼくは思います。そして、
それはサッカーだけではなくて、普段の生活の中でも大事なこ
とです。人種や文化の違いを超えて、みんなが安心して過ごせ
る社会を目指して、ぼくもできることから行動していきたいで
す。

九月一日について

高田中学校 二年



九月一日。皆さんは、この日付を聞いて何を思い浮かべまし
たか。一九二三年に起きた関東大震災を考える人が多いのでは
ないでしょうか。この日は、防災の日です。しかし、もう一つ
ほかの意味を持った日でもあるのです。それは、十八歳以下の
自殺者数が年間で最も多い日です。これは、SNSで知りまし
た。普段通りに、SNSを見ていたら、「みんなは九月一日どう
する？」という不思議な文章が流れてきたのがきっかけでした。
そして、未成年者の自殺者が多い日と知り、調べてみることに
しました。

初めに、年間十八歳以下の人がどれくらい自殺をしているか
について調べました。一九八〇年では、約二百人ですが、二〇
二四年では、五百二十九人と約三百三十人増えています。ま

た、小学生、中学生、高校生に分けた自殺者数のグラフを見ると、高校生が最も多いことが分かりました。その上、昔は、男子が女子よりも自殺者数が多かったのに対して、近年は男子よりも女子の方が増加していました。

次に、自殺する人が多い理由はなぜだろうと疑問に思いました。すると、学校でのいじめや勉強のプレッシャー、健康問題、周囲にSOSを伝えられない心理状態、家庭問題など様々な理由がありました。その中で、学校問題が一番多く、次いで健康問題、家庭問題が自殺の原因として多くありました。それぞれの中でも、原因として多いものを調べてみました。健康問題では、メンタルヘルスの問題が大きく、特にうつ病による自殺が多く見られています。家庭問題では、親による虐待や親からの心理的、精神的苦痛があります。学校問題の多くは、いじめです。九月一日という日は、多くの学校では、夏休みが終わり新学期の始まりのため、またいじめられるのではないかという不安や恐怖で自殺に発展するケースが多く、年々自殺者が増えていました。

最後に、自殺者数を減らすために、政府はどのような対策をしているのかについて調べました。すると、自殺対策基本法という言葉が出てきました。これは、未成年関係なく、年間の日本における自殺者数が、三万人を超えていた日本の状況に対処する法律です。二〇〇六年六月二十一日に厚生労働省によって公布されました。また、こども家庭庁に自殺対策室を設置したり、電話やSNSを活用した相談窓口を整備したりしています。実際、SNSによる相談延べ件数が一万百二十九件ありました。地方自治体は国と連携しつつ、相談体制の強化や居場所づくりなどに取り組んでいることが分かりました。居場所づくりは、安心して過ごせる安全な空間を提供すること、孤立を防ぎ社会とのつながりを育むこと、そして、生き抜く力を育み将来の自

立を支援することが目的とされています。学校においては、不登校やいじめなどの自殺のリスクの要因となる問題への対策、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを配置して子供や保護者の相談ができるようにする取り組みが行われています。実際、私も精神的に辛い時期があり、話を聞いてもらいました。すると、誰にも言えなかったことを相談できたり、自分の気持ちを言えたりしました。また、相談すると、新たな自分の一面を知ることができました。自分の新たな一面を知ると、私は神経質だから小さなことでも気にしてしまうことが分かりました。でもそれは、自分の良いところかもしれないという風に考え方が少し変わることもありました。考え方を変えるのが楽になったように思いました。

私は、自殺者が四十四年間で三百人以上増えていることに驚きました。また、男子より女子のほうが多くなってきているのは、学校での問題や、相談できる相手がいないという理由があるのではないかと考えました。そのため、居場所づくりはとても大切なことではないか、作ることで少しずつ減っていくのではないかなと思いました。そのような場所を作ること、新しく友達ができたり、相談をしたりできる場所になってほしいなと思いました。そして、悩んでいる人や困っている人がいる時は、悩みを解決できなくても話を聞いてあげたり、相談してみたらと提案したりしようと思います。

感謝の気持ちを言葉にして

近畿大学附属新宮中学校

二年



私は、言葉には人の心を動かす力があると思います。その中でも「ありがとう」という言葉には、人の心を温かくし、優しい気持ちを広げてくれる力があると感じています。私がそのことを実感したのは、小学生のとき、児童会で行った「やさしさ発見キャンペーン」という取り組みがきっかけでした。このキャンペーンでは、友達に優しくしてもらったことや、嬉しかった出来事を紙に書き、校内に設置した「ありがとうボックス」に入れます。児童会で、学校にあふれる「優しさ」や「感謝」を見つけようと始めて始めた活動です。「ありがとうボックス」の中には、こんな「ありがとう」が入っていました。

「落とし物を拾ってくれた。」

「係の仕事を手伝ってくれた。」

「宿題の直しを教えてくださいました。」

「六年生が遊んでくれた。」

「ありがとうが増えるようにと、児童会が考えて行動してくれました。」

児童だけでなく先生たちも感謝の言葉を書いてくれたことがとても嬉しかったです。ボックスの中の言葉を読んで、私は気づきました。それは、自分が当たり前だと思っただけのことでも、誰かにとってはとても嬉しいことになっているということ。そして、その「嬉しい」を「ありがとう」という言葉で伝えることで、さらに温かい気持ちが生まれるのです。「ありがとう」は相手の心を温かくするだけでなく、自分自身の心も穏やかにしてくれる、魔法のような言葉だと私は思います。それ

以来、私は小さなことでも「ありがとう」を口に出して、伝えるように心がけています。

「ありがとう」以外にも、感謝の気持ちを表す言葉はたくさんあります。たとえば、食事のときの「いただきます」や「ごちそうさま」もそのひとつです。これらの言葉には、料理を作ってくれた人や、食材を育ててくれた農家の人たちへの感謝の思いが込められています。私は外食をしたとき、店を出る際には必ず「ごちそうさまでした。」と大きな声で言うようにしています。けれども、周りを見てみると、何も言わずに無言で店を出て行く人も多くいます。それでも店員さんは笑顔で「ありがとうごさいました。」と言ってくれますが、私が「ごちそうさまでした。」と言うと、店員さんが少し嬉しそうな表情で「ありがとうございました。」と返してくれるのを感じることがあります。そんなとき、たった一言の言葉でも、人の気持ちを温かくできるんだなと実感します。

「ありがとう」や「いただきます」、「ごちそうさま」などの感謝の言葉は誰でも簡単に言える言葉です。お金もかからず、時間もかかりません。でもそれを言われた人の心には、きつと温かい気持ちが残ります。私は、そんな「感謝の言葉」がもつともっと広がっていけば、私たちのまわりには優しい気持ちがあふれ、よりよい社会になっていくと思います。だから私はこれからも、どんな小さなことにも感謝の気持ちを忘れずに、言葉にして伝えていきたいです。

男女差別をなくすために

近畿大学附属新宮中学校 二年



人権とは何かと考えたとき、私が最初に思い浮かべたのは、男女差別のことだ。

まず私は、男女差別についてインターネットで調べてみた。男女差別とは、「男性または女性であることを理由に不当な扱いや差別を受けること」。これは、生物学的な性別ではなく、社会的な性別（ジェンダー）の違いによる差別を指すと書いてあった。また、男女の教育格差や仕事における賃金格差、雇用機会の平均等、性別に基づく偏った固定的な役割分担など、世界のさまざまな国や地域で男女差別を背景とする問題があることを知った。

男女差別と人権の関係について調べてみて、私の知らないことが多く驚いた。中でも一番印象に残ったのは、性別による無意識のうちの決めつけが、差別につながるのだ。私たちは、無意識のうちに、性別や男女の役割について固定的な思い込みや偏見をもつことがある。「本当はもっと働きたいのに」「本当はピンクが好きなのに」「本当はパイロットになりたいのに」「男性はこうあるべき、女性はこうあるべき、という社会の偏見によって苦しんでいる人、何かをあきらめようとする人がいることで、ジェンダーの平等ではない差別が生じている。ジェンダーの固定しがちなさまざまな場面を、マンガの吹き出しで表現して、男性、女性どちらの声に聞こえてきましたか、と視聴者に問いかけるCMを観たことがある。赤ちゃんをあやす声は「女性」、経営方針を発表する声は「男性」、ご飯だよ、の声は「女性」、将来の夢はパイロット、の声は「男の子」、ピンクの

がいい、の声は「女の子」、子どもが発熱、有給取らせて、の声は「女性」、ふだんから、ジェンダー平等を意識していると私の考えとは真逆になると同時に、私の考えが固定していることが分かる。

男女平等な世の中にしていくためにはどうすれば良いのか。まずは私のような根本的な考え方を変えていく必要がある。昔から「男性は外で働き、女性は家事や育児をする」という日本独特の固定観念があり、今もなおその考え方の人が多くいる。そんな中で男性、女性のイメージや偏った考えをなくし、改めていくためにも、男女平等のための活動を伝えて行く必要があると同時に、男女差別に対する理解を深め、より多くの知識を得ることが大切だと思う。

昔からの考えや風潮、性別による無意識のうちの固定的な思い込みや偏見が、他人を否定してしまったり傷つけてしまったりするのであれば、今の時代に合わせて自分達の考えを変化させていかなければならないと思う。「女性はこうあるべきである」「男性はこうあるべきである」などと性別でその人のことを決めてしまうのは、もう止めなければいけません。一人ひとりの個性を認め合い、受け入れることで、全ての人が生きやすい世の中になると思う。しかし、すぐにはこのような世の中にはならないと思う。たとえ理解ができなくても、受け入れることができなくても、その人を否定せず、傷つけず、その人の個性として認めていける人になりたいと私は思う。

性別にとらわれず、すべての人が自分らしく生きられる社会をめざし、私にできることを一つずつ進めて行きたいと思う。

生きる権利

近畿大学附属新宮中学校 二年



この夏、私は「火垂るの墓」というアニメ映画を観ました。これは、戦争中の日本を舞台に、幼い兄妹が必死に生きようとする姿を描いた作品です。この作品は、清太と節子という兄妹が、戦争の中でどれほどつらい思いをし、命を落とさなければならなかったのかと思うと、涙が止まりませんでした。そして同時に、「人権」とは何か、「生きる権利」とは何かについて深く考えるきっかけになりました。

映画の中で、清太と節子は家を焼かれ、母親を亡くし、親戚の家に身を寄せますが、それでも冷たくされ、やがて自分たちで生きていくしかなくなりません。食べるものもなく、住む場所もなく、病気になっても薬も手に入らない・・・そんな状況の中で、二人は協力して生きていきます。

私はこの場面を観て、「人間には生きる権利があるはずなのに」と思いました。食べることも、寝ることも、安心して過ごすこともできず、子どもたちが命を落としていく現実。それはまさに、人権が守られていない状態だと思います。人は誰でも、どんなときでも「自分らしく、人間らしく生きる権利」がある。それが守られない世界が、どれほど残酷で悲しいかをこの映画は教えてくれました。

また、私はこの映画を通して、「子どもだから守られるべき人権」があることに気づきました。清太も節子も、本来であれば大人たちに守られる存在だったはずですが、しかし、戦争という非常事態の中で、大人たちも余裕をなくし、誰かを助けることができなくなってしまうました。その結果、一番弱い存在であ

る子どもが犠牲になってしまったのです。私は、「火垂るの墓」の兄妹の姿を、そうした現代の子どもたちと重ねて考えました。私たちは、今こうして安全な家で、毎日ごはんを食べ、学校に通い、友達と笑い合える生活を送っています。それは決して「当たり前」のことではありません。過去の悲しい歴史や、今も苦しんでいる人々のことを忘れてしまったら、また同じようなことが起こるかもしれません。だからこそ、私は「人権」について知り、それを大切にしようとする気持ちを持ち続けたいと思います。

この映画を観て、私はもつとまわりの人に優しくなろうと思いました。困っている人がいたら声をかける、当たり前なのに感謝する、平和の大切さを考える。そういった小さな行動が、やがて大きな人権の守り手につながるのではないかと信じています。

今年の夏は「火垂るの墓」という作品に出会えて、「人権」について深く考えることができ、私にとって大切なことを教えてくれました。それは「人は一人一人、尊重され、大切にされるべき存在だ」ということです。これからは私は、人権について学び続け、自分にできることを考えていきたいです。

不思議な言葉で

光洋中学校 二年



私にとって「幸せ」とは、まだ曖昧でよく分からない言葉です。私が幸せと感じる瞬間はいつも違っていきます。けれど私の幸せのほとんどは人との出逢いや繋がりによって生まれたもの

であると実感しています。例えば友達という当たり前のよう
かけがえのない存在の大切さと有り難さを、皆で笑っている
とき、一人で考えているとき等に身に染みて感じます。

私はそういうときに幸せを感じるけれど、友達はまた一人一
人幸せを感じる場面が違っているのだろうと考えてみると、
「やっぱり幸せって難しい」とさらに考え込みます。私は多分、
幸せを感じる人が多いです。歌を聴く、朝焼けや綺麗な空を
見る、誰かと話す、写真を撮る・見返す、風景、自然、趣味等
たくさん幸せがもつとあると思うとすぐワクワクします。

そういう幸せは自分の身の回りの辛さや悲しさも少しずつ減
らしてくれると思います。実際に体育祭のリレーを走り終え、
私が実力不足で落ち込んでいたとき、同じチームで走ってくれ
た先輩たちが励ましてくれて、その優しさから生まれた幸せに
私は本当に救われました。今でも思い返すと本当に幸せな気持
ちでいっぱいになります。このような経験から私は、幸せは特
別目立つことだけでなく、人との繋がりや、日常にあふれてい
るということに気付きました。友達、家族、先生、たくさんの人
たちと過ごす何気ない日々、当たり前ではないそれぞれの
幸せがあるのです。そしてあのととき私も幸せをもらったからこ
そ、困っている、悩んでいる誰かに声をかけたりして、幸せの
おすそ分けをしたいと思えるようになりました。そうして幸せ
を連鎖していけば、世界がちよつとずつ明るく、笑顔になっ
ていくのではないかと私は考えました。

最初にも述べたとおり、私の中で幸せとはまだ曖昧です。人
によって幸せのタイミングが違うからです。同じ出来事だとし
ても、一人一人が感じる幸せの大きさは違っているのです。そ
んな中で幸せの連鎖をしていくためには、それぞれの幸せを尊
重することが大切だと思います。そうすればお互いの感じる幸
せの大きさが大きくなるからです。具体的には相手の気持ちを

決めつけず、絶対にバカにしないことや、幸せな報告にも辛い
報告にも優しい言葉と行動を心がけることです。そういう行動
は幸せの連鎖となつて、いつか自分のことも、他の誰かのこと
も救ってくれるということを私は知っています。だから皆さん
にもこのことを知ってもらい、幸せを見つけ、生み出し、連鎖
させてほしいのです。誰もが幸せな世界をつくるのは難しいこ
とですが、一人一人がそれぞれ身近な幸せを見つけて共有し合
えたら、世界中の辛い・悲しいがほんの少しずつ減っていつて、
うれしい・楽しい・幸せが絶対に増えていきます。皆さんのち
よつとした声かけや行動で救われる人は世界中に何人もいるは
ずです。まずは学校などにある辛さ・悲しさを減らして、より
よい幸せな世界にしていきたいと思います。

私にとって曖昧とは、まだ曖昧でよく分からない言葉です。
世界がこの不思議な言葉であふれますように。

色々な人がいる世界

緑丘中学校 二年



私達の社会には、様々な人が暮らしています。その中には、
体や心に何らかの障害を持っている人もいます。障害を持つて
いることは、決して悪いことではありません。しかし、残念な
がら障害を持つている人たちは、時々、差別を受けることがあ
ります。差別とは違うからと言って、その人を不公平に扱うこ
とです。障害を持つている人に対する差別について、考えてみ
ました。

まず、障害を持つている人たちが、どのようなことを経験し

ているのかを、知ることが大切だと思えます。例えば、車椅子を使っている人が道を歩いていると、段差があつて歩きにくかったり、エレベーターが壊れていることがあります。目が見えない人や、耳が聞こえない人は、周りの人が気づかずに話しかけてきても、わからないことがあります。こうした不便さを感じることは、障害を持っている人にとつて、とても大きなストレスになることがあります。また、学校や職場でも障害を持つている人が差別を受けることがあります。例えば、障害を持つていることを理由に、授業の参加が制限されたり、仕事を見つけるのが難しくなったりします。

こうした差別があると、障害を持つている人は、自分に自信を持つことができなくなったり、孤独を感じたりすることがあります。それはとても悲しいことです。

では、私たちはどうすれば障害者に対する差別を、なくすことができるのでしょうか。まず第一に大切なのは、違いを受け入れることです。人はそれぞれに、違った特徴を持っています。目の色、肌の色、性別、そして、障害を持つているかどうかも、人それぞれです。でも、違いを受け入れて、お互いを尊重することが大切です。障害を持つている人も、私たちと同じように、笑ったり泣いたり、楽しんだり悲しんだりすることができます。普通の人間です。だからこそ私たちは、彼らに対して優しさをもち、差別せずに接することが必要です。次に助け合うことが大切です。もし、車椅子を使っている友達がいるなら、その友達が困っている時に手を差し伸べることができるかもしれません。もし、目の不自由な友達がいたら、道を案内してあげることができるかもしれません。こうしたちょっとした助けが、障害を持つている人たちにとって大きな助けになります。みんなが、少しずつ気をつけて助け合うことで、障害を持つている人ももっと楽しく過ごせることができると思います。

私たちが目指すべき社会は、みんなが一緒に暮らせる社会です。障害を持つている人も持つていない人も、みんなが楽しく、一緒に働いたり学んだりできる社会です。障害を持つている人に対して、優しさと理解を持つて接することが、私たち一人一人にできる大切なことです。

最後に、障害を持つている人が、自分らしく生きられるようにするためには、私たちが協力していくことが大切です。お互いに思いやりを持ち、差別もなくしていくことで、もっと素敵な社会を作ることができると思います。そして私たちが、これから障害への理解を深め、優しさをもって接することが、より良い未来を作るための大切な一歩につながると 생각합니다。

戦争が奪うもの

城南中学校 二年



僕はレスリングのアジア選手権に出場したことがあります。本来ならアジアの中の強い選手たちが集まって戦えるはずでした。しかし、その時は戦争の影響で、イランや他の国の選手が来ることができませんでした。国の代表として一生懸命準備してきた選手たちが試合に出られないことはとても残念で、僕自身も心から寂しく思いました。

レスリングは一对一で相手と向き合う競技ですが、戦う中で相手を尊敬したり、仲間のよう感じたたりすることができるようです。だからこそ、国が違っても同じ舞台に立ち、全力でぶつかり合えることは本当に大切なことだと思います。それなのに戦争は、その大切な機会を簡単に奪ってしまいます。練

習してきた時間も、努力も、そして夢に挑戦する権利までも奪ってしまふのだと実感しました。

戦争によって会場に來られなかった選手たちは、僕と同じようにレスリングが大好きで、同じように頑張ってきたはずですよ。それなのに国同士の争いによって夢を止められてしまうのは、本当に不公平で悲しいことです。人はみんな、自分の好きなことに挑戦し、安心して暮らす権利を持っているのに、それが守られない世界があるのだと強く感じました。

今回の経験を通して、僕は平和であることの大切さを学びました。試合に出られること、相手と戦えることは、決して当たり前ではありません。だからこそ、僕はレスリングができる一つ一つの機会を大切にし、同じ舞台に立つ相手をこれからも尊敬したいです。そしてスポーツだけでなく、世界中の人々がお互いを認め合い、安心して生活できる社会をつくっていくことが僕たちにとって大切な目標です。

さらに、僕自身も将来どんな立場になっても今回学んだ平和のありがたさを忘れず、人を思いやる気持ちを持ち続けたいです。小さな努力の積み重ねが、未来を変ええる大きな力になると信じて、これからもレスリングを頑張りたいと思います。

ヘルプマーク



熊野川中学校 二年

僕は、今年の夏、大阪万博へ行きました。その時に、赤色と白色の十字とハートマークのステッカーを服につけている女の子を見ました。その時は、何も思いませんでしたが、僕がパビ

リオンの待ち時間に並んでいると、さっきの女の子と同じマークのステッカーをリュックにつけている男の人がいました。あの二人が身につけていたステッカーは、十字でハートマークが同じものだし、何だろうと思ひ、携帯で検索してみると、「ヘルプマーク」ステッカーだということが分かりました。

このヘルプマークは、二〇一二年十月から開始されたサービスで、義足の人や、聴覚や言語、視覚障害の人、がんや難病の人、妊娠初期の人、精神障害や発達障害の人などが周囲の人の援助を得やすくするように作られたマークであることが分かりました。駅や役所、福祉センターなどで、誰でも受け取ることができます。

僕が見た、ヘルプマークをつけた女の子も男の人、ヘルプマークをつけていなかったら、助けを必要としていることがわからないと思います。僕は、目に見える障害を持った人や体の不自由な人には、何かあれば助けてあげようと思っていましたが、見た目にわからない人でも助けを必要としている人がたくさんいるんだと思いました。母も、ヘルプマークは、助けを必要としている人のマークということは知っていたようですが、ハートマークがついているので、心臓が悪い人がつけているのかと思ったと言っていました。僕も知らなかったように、まだ知らない人もたくさんいるのだと思います。

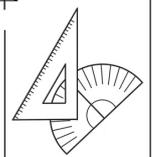
夏休み、姉が帰ってきた時に「ヘルプマーク、知っている？」と聞くと、姉は、「知ってるよ。大阪では、結構つけている人いる。」と言っていました。そして、ヘルプマークをつけている人がいたら、電車やバスで席を譲ったり、困っている様子だと声をかけたりしたらいいことを教えてくれました。また、ヘルプマークの表側は十字にハートマークですが、裏側にはつけている人の病気の名前や症状など、またその人が、どんな時にどんなことをして欲しいのかとかを書くこともできるらしいです。

耳が聞こえない人がいたら、「私は耳が聞こえませんが紙に書いてください。」や、発達障害がある人なら、「人が多い場所でパニックを起こす場合があるので静かな場所へ導いてください。」などと書いている人もいます。また、「病気を保持しているのに、事故の時はこの病院に連絡してください。」と、連絡先を書いてある人もいます。病気はあるが、人ごみや電車、バスなどなかなか周りの人に分かってもらえない人にとつて、このヘルプマークは心強いと思います。和歌山県ではまだヘルプマークをつけた人を見たことがありません。でも、それは今まで知らなかったたので、気にしていなかったからかもしれないです。

このハートマークは、相手にヘルプをする気持ちを持っていただくという意味を含んでいるらしいです。体の不自由な人も、ヘルプマークをつけている人も、みんなが困っている人がいたら助けようという思いやりの心を持っていたら、どんな人も、住みやすい世の中になると思います。また、ヘルプマークだけでなく、世の中にはいろんなヘルプマークのステッカーがあると思います。車でも、四つ葉のクローバーや車椅子の障害者マークのステッカーを、車の後ろに貼っているのを見たことがあります。他にも、調べてみると、補助犬のマークや、耳の聞こえない、聞こえにくい人が手話でのコミュニケーションの配慮を求めている時の、手話のマークがあることが分かりました。こんなにたくさんさんのマークがあることに、とても驚きました。僕も、バスや電車や、どこかに行った時に、困っている人やヘルプマークをつけた人を見つけたら、思いやりの心を持って声をかけたり、席を譲ったりして助けてあげたいと思います。このマークがもっと世の中に広がって行って、困っている人が過ごしやすく、助け合える世の中になるといいと思います。

考え方の違い

光洋中学校 三年



僕が「コロケにはコーラをかけるべきだ」という考え方なら、あなたはそれを変に思うでしょう。そこから、あなたはいろんな行動をします。共感・反対・質問等です。僕はこの中の質問が最も良い選択だと思います。

昔、道徳の授業で「いじめといじりの違い」についてダイベートが行われました。このダイベートの焦点は、題材のいじめといじりの同一性で、それらはこう違う、こう同じということ。そして、いじめといじりは違う側と、僕を入れた、いじめといじりは同じ側に分かれて、いざダイベートが始まりました。しかし、意見が出て来ません。そこから数秒、一つ目の意見が出ました。それに続くように色んな意見も出ました。一度全体で意見を整理した後、次はそれらの意見の批判や肯定が始まりました。僕は、ただただ意見をぶつけるだけでは意味が無いと、相手側に意見の詳しい理由を質問したり、逆のシチュエーションを想定させたりと、色々な手を使いました。その後、ダイベートが終わり、僕はその振り返りをしました。僕が使った手は三つ、提案・質問・意見です。この中で一番手応えを感じたのが質問でした。なぜかというところ、僕が相手側に質問をしたとき、相手側から自身への共感の声が聞こえたからです。そのことに疑問を抱いた僕は、そのときの状況をもう一度考えました。そこにありました。僕が質問を最も良いと思う理由が。それは、自身も相手も成長できるからです。質問をすると、相手からの発言の理由が聞け、新視点や、相手の独特な考え方などに気が付きます。色んな視点や考え方をすることは大きな

成長で、物事に対する偏見をなくし、様々な人に寄りそうことができず。相手側からしても、自分の考えを深めることができたり、自身の考えを別視点から見られたりします。

このように、質問は多人数に色んな良い効果を生み出します。

しかし、その中にはとても気付きにくい罠が隠れています。その罠とは、まず質問をしてしまうことです。質問は自分の考えと相手の考えを照らし合わせた時に生じた疑問を相手に伝えて、答えを求めることです。だから、まず自分の考えを深めるようにしないと、有意義な質問にはなりません。そのため、相手に投げかける質問の数が多くなり、言葉のリレーが円滑に進まないのです。

冒頭の「コロッケにコーラ」は極端な例で、会話の中に出てもすぐにネタだとわかりますが。中には「寿司に塩」「たこ焼きにポン酢」などの実際にある組み合わせは、中々触れづらいものです。でも、「それはどのような感じなの？」という風に聞けば、相手の答えに、より深い返しができたり、共感したりできます。勿論、こんな風に上手くいくとは限りません。しかし、質問することは自分と相手にとって重要です。物事を詳しく知ること、だんだんと正しい知識を身に付けていくことと同義です。色んな嘘、真実が蔓延するこの世において、「質問」程、自身の真つすぐな成長を促す行動は無いのではないのでしょうか。

本能

緑丘中学校 三年



あなたたちは、周りや環境に合わせて悪口を言ったり、人を不快にさせたりしたことはあるだろうか。私は今も昔も、そのようなことをしているなど、その問題について見直すべきだと思つた。

人は、人に嫌われないように頑張つて生きようとする。人はそのためになら、自分の意見や相手の気持ちを考えなくなつてしまう。これは、人間の本能なのだと思う。でもそれは知らず知らずのうちに人を傷つけてしまうし、それが逆に人からの信頼を失うことになつてしまうこと。そんな簡単なことを私は今まで考えずに、人の気持ちを察していた。

「本人が知らなければ大丈夫。」「みんな言つてるし、もしバレても・・・。」という、ゆがんだ考え。それは自分自身を疑う、信じられなくなる元だつた。悪口でしか盛り上がらないような関係。そんなものは友達とも言えない。言葉には強い力がある。思いやりや愛情を伝えることもできるが、時に傷つけることもできる。全ての人が平等に持つべき基本的な権利である。尊厳を持つて生きる権利、自分の意見を表明する権利。そして、身体的・精神的な苦痛から守られる権利は、どんな人にも平等に保障されなければならない。悪口を言うことは、その人の尊厳を踏みにじり、その人の人権を侵害する行為となる。私たちは言葉を選び、他人に思いやることが大切だと考える。

では、私たちはどのような言葉を使えば良いのか。それは相手の立場になつて考えるとこから始まる。自分が言われて嫌なことを他人に言わないこと。相手との違いを尊重し、ポジティブ

ブな言葉で相手を励まし、サポートすることだ。それは簡単なことだが、今の人にはできていないように思う。

悪口を減らし、思いやりを持った言葉を使うことが、平等で調和された社会を作る一歩となる。私たち一人一人が、言葉遣いを見直すことで、より良い社会を築くことができる。相手を尊重すること、そして何より自分の言葉に責任を持つことが、人権を守る第一歩となる。

そして一番大切なことは、もし悪口を言っていたら、その場所をやめるように伝える勇気を持つ。それが他人を守り、自身を成長させるきっかけとなることだろう。

人を簡単に傷つけられる一番の凶器。それは言葉だ。言葉の持つおそろしさを全員が理解し、正しく使うこと。それをいつまでも忘れないようにすることが何よりも大切だ。

戦争の記憶が教えてくれたこと

城南中学校 三年



「戦争はもう二度としてはいけない」「戦争は悲惨だ」そう何度も教えられてきた。私は、戦争を体験していない。教科書や本で戦争の写真を見るだけだ。だからか、これらの言葉の意味を分かつてはいても、理解はしていなかった。しかし、沖縄での平和学習を通して、これらの言葉の意味を理解し、今の平和な生活がどれほど幸せで尊いものかを実感した。

私たちは修学旅行で沖縄を訪れ、平和学習を行った。最初に訪れたのはガマだった。ガマとは、沖縄に見られる自然の洞窟である。沖縄戦では防空壕や野戦病院として使われたという。

ガマに入ると、中は暗闇だった。太陽光が頭上の穴から差し込んでいたけれど、ほんのわずかだった。人が生活していたことが信じられないくらい怖い場所だった。また、中には破傷風患者専用の空間があった。ガイドさんによると、ここに入られた破傷風患者には食べ物も与えられず、ただ死を待つだけだったらしい。この、人権を踏みにじるような行為の話を聞いて、怒りと悲しみが込み上げてきた。戦争がなければ、このようなことも無かっただろう。戦争の悲惨さを痛感した。

次は平和祈念公園に向かった。「平和の礎」という戦死者の名前が刻まれた石碑が数え切れないほどあった。そこで何よりも驚いたのは、今でも追加刻銘があることだ。様々な理由があるが、その一つは、現在も沖縄戦での行方不明者が、国の調査や遺骨などで発見されることがあるからだという。八十年前の戦争の被害はまだまだ残っているのだ。

平和祈念公園に隣接している資料館にも足を運んだ。そこでは教科書には載っていないような資料や写真があった。写真はどれも目を背けたくなるような残酷なものばかりだった。痩せ細った子どもの写真や血まみれの男の写真などだ。見ているだけに苦しかった。

三か所を訪れていて、戦争の恐ろしさや悲惨さが理解できた。その一方で、平和とはどういうことなのかを考えると、答えは日常の中にあると気づいた。朝、学校へ安心して通えること。友達と喋って笑い合えること。家に帰れば、家族が「おかえり」と言ってくれること。その一つ一つは平和だからこそ成り立っているものだと思う。

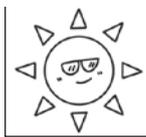
では、平和を守るために私たちができることは何だろうか。一つは、思いやりの心を持つことだ。家族や友達との意見の違いを受け入れ、互いに尊重することは、小さな行動だが平和を守る第一歩だと私は考える。さらにもう一つは、世界の現状に

目を向けることだ。現在も、世界各地で戦争や紛争が続いている。私たちが関心を持ち、知ろうとすることが、平和を守る力になるのだ。

私は沖縄での学びを忘れず、身近な生活の中で平和を意識して行動していきたい。自分が平和を守るためにできることを少しずつ続けていこうと思う。そして、世界中の人が安心して暮らせる日が来ることを願っている。

私が歳を重ねる理由

熊野川中学校 三年



小学生の時と比べて、「将来のことを考えるようになったなあ。」と、とても感じます。受験生になったので、余計に考えてしまふんだと思います。でも逆に、「まだ中学生だなあ。」とも感じます。

私は、自分のことがあまり好きじゃないな、と思うことがあります。いろんな後悔を積み重ねて、思い出す度に、「なんであの選択をしたんだろう。」と落ち込んでしまうからです。私、大人になりたくないんです。今まではシンプルに、「働きたくない。」「責任とかめんどくさい。」と思っていました。でも今は、歳を重ねると、とても怖いことなのではないかと考えるようになってきました。歳を重ねると後悔が増えていくから、それが怖いのです。

「もっと勉強しとけばよかった。」「あの子に告白しとけばよかった。」「昔に戻りたいな。」そんな言葉を誰かから聞いたことがあります。これは私だけかもしれませんが、歳を重ねている人ほどよく言うイメージがあります。この後悔はだいたい変えら

れないものが多いです。虚しい気持ちや、受け止めなければならぬ辛さが、嫌でも感じます。それが私には怖すぎるのです。

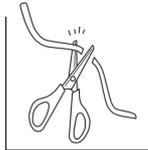
でもやっぱり、後悔ゼロに歳を重ねるのは難しいです。実際、今の私にも後悔は当たり前にあります。例えば、「もっと頑張っていたら試合に勝てたかな。」とか、「余計な一言言ったな。」なんて、中学生なのに後悔をしている自分があります。それでも私はふと思っただけです。「今日一生懸命頑張ったら、明日それが今よりもっとうまくいく。そうなれば、私は私のことをもっと大好きになれるかもなあ。一生懸命になれる日があったとしても、それはそれで一日を乗り越えてるな。」って、甘い考え方ももしれないですけどね。私が歳を重ねる理由がこれだったら、素敵だと思ふんです。毎日一日を乗り越えたら、それで成長できます。昨日の私より一日頑張って乗り越えた自分の方が、素敵に見えます。自分を好きになっただけの気がしません。私は大人になるために毎日を生きているのではなく、きつと自分を好きになるために歳を重ねているんです。大人になるんです。きつとこうだと思ふんです。もしそうなら、大人になるって悪くないなと思います。歳を重ねるのも怖くない気がします。後悔は増えていくけれど、自分の好き度も増えていくんです。そう思うと、気が楽になる気がします。私、自分のことがあまり好きじゃないからこそ、うまくいくように願っているんです。もしかししたら、明日の自分が直してくれるかもしれないじゃないですか。そう思うと、なんだか明日も楽しみだなと思うんです。未来の方が、私は私を大好きなんです。それに、きつと人生、後悔だけじゃないです。

大人になる、歳を重ねる理由をこれに限定しているわけではありません。きつと数え切れないほどあると思います。後悔の怖さを考えた時に、この理由があれば少し生きやすくなると思っただけです。歳を重ねない方法って、死ぬことしか思いつかな

いんです。そんなの嫌じゃないですか。生きやすい人間になるには、自分らしく生きるためには、気を楽にする方法を知っていくのが大切だと思うんです。もしかしたら、希望を持ちすぎなのかもしれません。でも、大人になるのが怖いのは、歳を重ねるのが怖いのは、希望より不安が大きいからだと思うんです。希望を持つ事って恥ずかしいことじゃないんですよ。希望が応えてくれなかった時は辛いかもしれないけれど、絶望だけだったら人間、ここまで生きていけないわけですし、きつと大丈夫です。自分に合う答えや生き方を見つけていきましよう。あなたは歳を重ねる理由って何だと思えますか。何だったら素敵だと思いますか。私は、自分を好きになるために歳を重ねていきたいと思えます。

誹謗中傷の危なさについて

熊野川中学校 三年



今、現実の世界ではインターネットを利用する人が多くなり、SNS上に人の悪口を書いたりする人が増えました。最近、『誹謗中傷』という言葉がニュースやネットでよく見かけるようになりました。ところで、皆さんは『誹謗中傷』という言葉聞いたことはありませんか。

『誹謗中傷』という言葉は二つの意味があります。「誹謗」という漢字の意味は、「悪口を言って他人を責めること。」です。「中傷」という漢字の意味は、「根拠のない嘘や自慢で他人を傷つけること。」です。私は最近、ニュースで「自殺」という言葉を耳にすることも増えました。その理由の中に誹謗中傷が原因にな

っているケースがあると知り、とても心が痛くなりました。誹謗中傷が起きているだけでなく、大変な問題なのに、それが原因で命を絶ってしまう人がいることを考えると、心が苦しくなります。

私はSNSのコメント欄を見たとき、「うざい」「きもい」「消えろ。」などの言葉が書き込まれているのを何度か見たことがあります。そういう書き込みをしている人は、どんな気持ちでそうしているのか、そしてそれを見た投稿者の気持ちを本当に考えているのか、と疑問に思いました。相手の立場になって考えれば、きつと違う考えや行動ができるはずです。まずは、その「想像する力」を持つことが大切だと思います。

今の社会はインターネットにより、とても便利な時代になっています。調べ物がすぐにでき、遠くにいる人でも簡単に連絡が取れる反面、使う人の心が乱れていると、簡単に人を傷つけてしまう「武器」にもなります。便利の裏には危なさもあることを、私たちは忘れてはいけません。特にSNSは、感情的になったままの発言や、軽い気持ちでの「悪ふざけ」が、そのまま世界中に広がってしまう怖さがあります。これは現実の会話とは違い、一度広まった言葉は完全には消せないという特徴があるからです。

また、誹謗中傷が原因で精神的な病気や障害にかかる人もいます。例えば、「強迫性障害」という症状は、不合理だと分かっているにもかかわらず頭から離れない考えや、その不安を打ち消すための行為を繰り返してしまう病気です。誹謗中傷によって引き起こされた障害は、その人の人生を変えてしまい、今まで通りの日常生活ができなくなる可能性があります。精神的な障害は心に深い傷を残し、なかなか治らないことも多く、一生抱えていく場合もあります。誹謗中傷や命や生活に関わる重大な問題であることを、もっと多くの人に知ってもらいたいです。

誹謗中傷は相手だけでなく、自分の心も傷つけます。皆さんは、何かで悪口を言った後に、心のどこかでモヤモヤした気持ちになったことはありませんか。それはきつと、「これって本当に言ってる良かったのか。」と心の中で感じているからだと思いません。言葉は人を励ますこともできると思いますが、逆に深く傷つけてしまうこともあります。だから私は、これからも、もつと言葉遣いに気をつけ、責任を持って話すようにしたいと思います。人を悲しませるよりも笑顔にしたり、楽しませたりした方が、自分の心も喜ぶと思います。

これからも、インターネットやSNSは、ますます発展し、私たちの生活に大きく関わっていくと思います。だからこそ、ネットやSNSでも「思いやり」や「優しさ」を忘れることなく、相手の気持ちを考えて行動することが大切です。もし自分が傷つく立場になった時、「あの時助けてもらえた。」と思える社会は、きつとお互いが支え合える社会です。私たち一人一人が、小さな心がけを続けていく必要があります。優しい言葉かける、噂を広めない、相手の努力を認める。そんな小さな行動が誹謗中傷を減らす大きな力になると、私は思います。

私たち一人一人が誰かを傷つけるのではなく、心に残る良い思い出を作れるような行動や言葉を使っていくことで、誹謗中傷のない社会に近づけるのだと思います。私も、これからは自分の言葉と行動に責任を持ち、人を笑顔にできる存在でありたいと思います。そして、誰もが安心して自分の考えを発信できる世界を守るために、今できることを少しずつ積み重ねていきたいです。そうすればインターネットは「人を傷つける場所」ではなくて、「人と人がつながる場所」になると、私は思いました。